

1991年の願望

奥山倫明

近頃の研究室旅行ではカラオケが恒例になっていて、今年は田丸先生にも半ば無理やり「瀬戸の花嫁」を多くの女子(?)学生とともに歌っていただいたのだが、少し以前の旅行でゲームが大流行したことがあった。これには私と同年に学部卒業で今や広告業界で活躍中とかいう境治氏の功績が大で、彼は幾つものマニアックなゲームを文字通り抱えては旅行にやって来てくれたのだった。それらのゲームには英文の説明書が付き物で、初めての者にはそのやり方を理解するのに結構骨が折れたものだったが、それはアルコールが入ったあとのことだからというよりは、自分の語学力のほうに問題があったからかもしれない。

そうしたゲームに意外な活躍をされたのが、ほかならぬ田丸先生であった。先生と研究室旅行といえば、かつての旅行で示された人並外れた自動車の運転技術のことは、秘かに語り継がれてきていて私も伺っていたが、また別の才能を垣間見せ

ていただいたことになる。というのは先生にはかなり遅い時間まで延々と、私たちのお遊びに付き合っていたのだが、初めてのゲームだというのに最終的に見事勝利を収められるその打ち込み方は、決して遊び半分といったものではなかったのである。先生の勝負に賭ける徒ならぬ意気込みには、思わず目を見張ったものであった。ご指導をいただいている者が言うことではないが、たとえ学問の道をお選びになっていなくても、何か別の方面で発揮されていたであろうような才能が、あの華奢なお体には隠されていたように思われる。

ところで学部の頃の自分を振り返ってみると、今日に至るまで続いているかもしれないのだが、一方に信仰があり他方に研究があるという二分法的発想から離れられずにいた。私にとっては「宗教とは何か」ということよりは、むしろ「宗教学とは何か」ということのほうが切実な問題だったのである。宗教の研究自体に向かうのではないそ

うした関心も、宗教学という学問にとってまったく無意味であるというわけではなさそうだとすることを、私は田丸先生のお書きになるものから自己流に読み取り、学部の卒業論文では宗教学の方法論を扱うことにしたのであった。

そうした私にとって田丸先生が講義をなさっていた「宗教学概論」は、非常に興味深かった。あの頃は今よりも熱心に聴講していたからそうだったのか、私は先生の口調の、とりわけ文末の慎重な結び方に、学問の厳粛さともいべきものを多分生れて初めて感じていた。ソクソクッとくるようなスリルをおぼえる箇所が、毎回の講義のなかには必ず含まれていた。

あの年度にまだ先生の『宗教学の歴史と課題』がまともなまられていなかったことは、あとから考えると私にとってよかったことだと思う。結果的に卒論は、田丸先生があちこちで書かれたことを自分なりにまとめた「田丸徳善研究」的なものになっていた。それでも資料は自分で集めたような気になっていたのだから、それがすでに一冊の本になっていたとしたら私の立場は無かったことになる。

ついでに言うとその年の大学院の入学試験では一人の宗教学者の学説を検討することが求められていたのだが、かろうじてそこで後の指導教官を論じることにはならず済んだのは、ファン・デル・レーウの『宗教現象学入門』にも目を通していたからである。もっとも私が熟読していたのは、本文ではなく日本語版巻末の解説であった。

しばしば語られる宗教学研究室の居心地の良さ、こうして学部の頃から慣れ親しませていただ

いてきているのだが、その雰囲気醸成にやはり田丸先生のお人柄が欠かすことのできないものであったのは確かであろう。学生から先生方に対してよりも、先生方の方からより多く気を遣っていただいているのではないかと、ある種倒錯した気分を時折り感じるこの研究室の心地よさを振り返るとき、しかしながら、個人的には若干の痛みもまた感じないわけにはいかない。学部の頃の金曜日一時限目、田丸ゼミのまどろみが思い出されるからというばかりでなく、大学院で指導教官をお引き受けいただいてからの自分の不勉強もそのもとにはあって、今後の方が教えていただきたいことがたくさんでくるだろうと思うのだが、結局、今のところは先生の問題圏から自分が一歩も踏み出すに至っていないということに気づかされるのである。その一歩が踏み出せたとき、少しはご指導の報いることになるのではないかと考えてはいるのだが。

以前「宗教学概論」の講義において、田丸先生は日本の宗教学の三〇年説を指摘されていた。1931年の宇野野空『宗教学』、1961年の岸本英夫『宗教学』と挙げられ、故柳川啓一先生の『宗教理論と宗教史』に触れていらっしやうと記憶するが、敬意を表されていたとはいえ柳川先生のを並べるのは年代的には少し無理があったと思う。その後田丸先生の御著作もまとめられたのであるが、やはり私は三〇年説に従って1991年に期待したいのである。もっともそのときには、私が依然として田丸先生の手のひらのなかにいるのに気づくだけの結果になるのかもしれない。